

2019 シンポジウム案

天然アユが元気に暮らす川づくり
～阿摺ダム下流における河床改善実験の結果から～

○趣旨

矢作川では 1990 年頃からアユの不漁が続いており、特にダム下流では細かい砂礫の減少や河床の礫が動きにくくなるなどの川底環境の悪化が不漁の原因と考えられています。そこで矢作川研究所では、矢作川の河床環境の悪化が顕著な場所を代表させ阿摺ダム下流域で河床改善実験を 2017 年に開始しました。実験開始から 2 年半が経過した現在、新しい礫を置いた場所にはアユが集まり、巨石周辺になわばりを形成すること、置いた礫につく藻類の状態がわかってきました。

矢作川では天然アユが遡上する川でありながら、アユの友釣り漁の不漁が続いています。今回のシンポジウムでは、実験結果をもとに矢作川の河床改善の方策を考えます。

○内容およびタイムスケジュール

- 13:30 開会のあいさつ
- 13:40 研究報告（50 分） 報告者:研究員
- 14:30 休憩
- 14:40～ （仮）高橋勇夫さんのご講演（30 分）
「（仮）全国のアユ漁場の状況と河床改善や土砂還元の事例について」
- 15:10 休憩
- 15:20 ディスカッション「天然アユが元気に暮らす川づくり」（90 分）
パネラー：天然アユ実行委員会アドバイザー 4 名
（豊橋河川事務所 1 名）
コーディネーター：山本敏哉
- 16:50 閉会のあいさつ

○日程： 令和 2 年 2 月 29 日（土）

○会場： 豊田市産業文化センター 小ホール（1 日貸し切り）

○主催： 豊田市

○後援： 国土交通省豊橋河川事務所
愛知県豊田加茂建設事務所
矢作川水系八漁協連絡協議会

○シンポの開催目的

- 1 全国に例を見ない河床改善実験（ソジバ実験）の成果を報告、共有する
【研究仮説】アユがなわばりを形成しなくなったのは、河床のアーマーコート化の進行により攪乱頻度が減少し、餌の付着藻類の質が低下したため
- 2 今後、矢作川の河床改善実験研究をどのように展開するか議論し、関係者の共通認識・連携を得つつ方向性を出す

○研究報告のポイント

- 1 出水直後の河床環境を創出することで、元気な藻類が生えアユが餌場として活発に利用し、なわばりを形成することが確認できた（仮説が当てはまることを検証できた）
- 2 河床のアーマー化が最も進行した場の一つであるソジバで改善ができた
- 3 （昨年と今年の調査結果）藻類やアユの生息状況から、ソジバ以外に百月ダム下流、越戸ダム下流と河床の劣化した場所が複数あることがわかった。今後、これらの場所をどのように改善していくか、ソジバ実験の成果を活かし、場所に応じ次の実験を展開する
- 4 投入後2年目には新鮮な状態ではなくなることから、早くも改善が必要
- 5 今後の改善事業（案）・・次の研究にどうつなげるか
 - 1) 土砂還元で生じるクレンジングによる付着物剥離更新（現河床を攪乱）
【仮説】劣化したダム下流の河床を、土砂還元で河床をクレンジングさせることによりソジバで再現したのと同じ状態を創ることが可能
 - 2) 中州や河岸の堆積礫を川に戻すことで攪乱を促進（新河床の創出）
 - 3) その他の手法

○パネルディスカッションで論議する項目

- 1 アユは何をたよりに新鮮な礫の上に集まるのか、なぜ2年目には来なくなる？
- 2 土砂還元によって生じるクレンジングによる河床改善の手法の可能性
- 3 その他人為的な河床改善の手法と場所の選定
- 4 高橋勇夫さん講演の他河川の事例とのすり合わせ
- 5 その他ソジバの研究成果についての議論
- 6 派生する研究テーマ
 - 1) 水温の日周変化のズレが生物群集におよぼす影響
 - 2) 出水強度と現在の河床攪乱との関係
 - 3) 河床の良し悪しとアユ以外の魚類との関係

参考：現在の研究のステージ（研究期間：2017～2020年度）

- 1 当初設定した仮説の検証が今年度完了
- 2 解明できた部分、できなかった部分を取りまとめ、提言書を来年度末までに完成
- 3 成果にもとづいた河床改善を提案するとともに、次のステップとなる研究を検討する